

町民文芸



只見短歌会

十一月詠草

大塚栄一

指導

吹く風に軽き音させ静けさをいや増す山の落ち葉の溜り

小倉キミ子

燃ゆるごと鶏頭深く色づきし無人の駅を久びさに通る

馬場 八智

畑に出る事が生き甲斐仕合せと卒寿の友と畔に憩ひぬ

渡部ゆき子

降雪を待ちて甘味を付かせむと白菜採らぬはわが畑のみ

目黒 富子

冬の朝雲の切れ間に光差し煌めく山は名画のごとし

飯島小百合

ふと開けし祖母の形見の手箱より我が誕生の命名書出づ

関谷登美子

「火の用心」書き終へし孫小さき腕に墨あと僅かに残して遊ぶ

新国由紀子

早朝の大病院には眠りある受付待ちの人多くして

渡部ヨリ子

ながく病むわが足洗ひくるる娘の白髪増へしに言葉もあらず

新国 洋子

(出詠順)

只見俳句会

十二月例会

目黒十一

指導

大鍋の冬至南瓜を振舞いり

一穂

苛など知らずに生きて雪を掘る

雨粒の光る葉つ葉や今朝の冬
びったしと池の水際ひし紅葉

都

大寒波五時の鐘音曲げており
ロシアより来る寒波にただ一人

修一

振り袖の振り返る笑み七五三
いつの間に厚着している丸い肩

味代子

年つまる妻の朝夕暖を見ず
遠目にも水場の楢に熊の棚

吉児

願ぎごとを二つに決めて初詣
霜枯れや八十路で舞うや恋のうた

弘子

大きな家を守る女人あり雪沈沈
餅搗きや月の兎は知らぬ園児達

幸生

舞い降りし鶴の一期や地に抱かれ
茶の花やわれを叛きし人許す

恒夫

クリスマスユーミン聞いて急ぎ足
吹雪の夜ばんばの話囲炉裏

信

鈍色の塔に残照雪の山
誕生の「ねっか」に乾杯年忘

礼